

2019年度 コミュニティ・デザイン・プログラム in 大船渡 募集要項



1. コミュニティ・デザイン・プログラム in 大船渡とは

本学は、東日本大震災の翌年2012年4月、震災で大きな被害を受けた岩手県大船渡市と「災害復興にむけた連携協力に関する協定」を締結し支援活動を開始しました。2016年4月には、更なる多様な連携や協働の取り組みの促進を目的とした「包括連携協定」を締結し、現在も支援活動を継続しています。その大船渡市をフィールドとして、被災場所の視察や地域住民との交流を通じて現在の課題やニーズを把握し、大船渡の未来を考えるワークショップを基軸としたプログラムです。なお、本プログラムは「立命館大学学びのコミュニティ集団形成助成金（正課外プログラム）」の助成を受けています。

2. 本プログラムの目的

- (1) 大船渡市の自治体・事業者・学生らとの交流を通じて復興計画の進展後の課題や展望を理解する。
- (2) 参加者どうしでの対話を通じて柔軟な発想のもと大船渡の未来を拓く提案を構想する。
- (3) 上記(1)(2)の経験を通して、社会の課題に対して自発的に活動する力を身に付けることにより、正課・正課外といったプログラムの枠組みにこだわらず、今後の自主的・主体的な学びのテーマを定めて行動できるようになる。その際、他者の掲げるテーマへも関心を向け、実践的な学びのコミュニティの組織化に貢献することが期待される。

3. プログラム内容

ガイダンス	2019年7月22日(月) 18:00~19:00 @立命館大学 各キャンパスの学生オフィス ・本プログラムの内容と参加意義の理解 ・大船渡市に関する学習及び獲得目標の設定 等
事前学習 1回目	2019年8月2日(金) 9:00~12:00 @キャンパスプラザ京都 6階第1講習室 ・グループで設定したテーマについて現地での活動をデザインする
事前学習 2回目	2019年9月9日(月) または 10日(火) 9:00~12:00 (参加者の希望により調整) ・グループで設計した現地活動についてのフォローアップ、相談会
現地学習	2019年9月15日(日) ~21日(土) @大船渡 計6泊7日(うち、車中2泊) 9/15(日) 20:30~ 京都駅集合、21:00~夜行バスにて移動(京都~仙台) 9/16(月) 8:30~ 仙台駅到着、9:00~貸切バスにて移動(仙台~大船渡市) PM 「触れる」：大船渡市での被災状況視察、大船渡市についてのレクチャー等 9/17(火) 9:00~ 「知る」：テーマ別にフィールドワーク・ヒアリング 9/18(水) 9:00~ 「交わる」：大船渡高校訪問、高校生との対話、互いの学びの紹介 9/19(木) 9:00~ 「深める」：今後へつなぐ活動の検討、フィールドワーク 9/20(金) AM~ 「味わう」：朝市を体感し伝統に触れる、大船渡市の魅力の発見(15:00頃まで) 16:00~ 大船渡発→仙台駅、19:30~夜行バスにて移動(仙台~京都) 9/21(土) 6:30~ 京都駅着、解散 ※上記期間中に大船渡市長への表敬訪問、被災状況視察、大船渡駅周辺まち歩き等を予定しています。 ※上記時間は変更となる場合があります。集合場所は仙台駅でも可としますが、その場合の交通費は自己負担となります。
事後学習	2019年10月 ※日程は後日調整 ・本プログラム参加の振り返りおよび成果報告の実施 ※その他、災害復興支援室や学生部が主催する成果報告会(日程未定)にて成果報告をしていただきます。

4. 募集概要・日程

募集期間	2019年6月28日(金) ~7月17日(水) 13:00		
出願要件	①本学の正規学部学生であること	②学籍状態が「在学」または「留学」であること	③活動報告書を提出し、本大学から求められた場合は成果報告を行うこと
	④事前・事後学習含む全てのプログラムに参加できること	⑤(留学生の場合)日本語での議論についていける日本語能力を有すること	⑥今年度停学以上の懲戒を受けていないこと
出願方法	指定の参加申込書	費用	交通費・宿泊費無料(大学が全額助成) ※現地での食費、保険代は個人負担
募集人数	若干名 ※応募者多数の場合は、過年度当プログラムに参加したことのある方よりも新規の応募者を優先して採用することがあります。また更なる課外自主活動参加への拡がり期待していることから低回生の採用を優先させる場合があります。		
出願場所	学生オフィス窓口(衣笠学生オフィス:研心館2F BKC学生オフィス:セントラルアーク1階 OIC学生オフィス:A棟1階)		
参加学生発表	2019年7月19日(金) 17:00 ※manaba+Rにて通知します。		

今回、2016 年度末に大船渡市と立命館大学のコラボレーションによって開始した「まちづくり」をテーマにしたワークショップを、「コミュニティ・デザイン」という観点でリニューアルして実施します。コミュニティ・デザインとは、地域の資源を活かし、人・物・出来事のつながりを編み直す、現場の営みを意味します。「まさか」のとき、いのちが助かり、助かったいのちが救われるかどうかは、自らが身に付けた「いつも」の振る舞いであると、阪神・淡路大震災で被災された方々のインタビューをまとめた『地震イツモノート』に記されています。そうした常々の習慣に加えて、ふと思い出す「いつか」の風景もまた、いのちを守る知恵となりうるものです。

この夏、発災から 8 年半が経過しつつある大船渡で、「今」を見つめ、「これから」を見据える実践的な学びの場を設けることになりました。芝生の上を吹き流れる風のように、関西から訪れる私たちが重ねる視点と言葉によって、ひととまちと社会の未来を展望する機会になることを願っています。

プログラムコーディネーター

山口洋典（立命館大学サバーシングセンター正課科目「シチズンシップ・スタディーズ I」減災×学びプロジェクト担当教員、立命館 SDGs 推進本部事務局長）

大船渡まちづくりプログラム 2018 参加者の声

「自分だけが被災者ではない」

何ができるかを考え、困っている人を助ける。
非常事態だからこそ住民同士の助け合いが重要になる。
そんな意識の持ち方で救われた人もたくさんいるだろうし、
ひとの繋がりが強かったからあるとき乗り越えられたのだと思う。

自分はどのなのだろう…

「呼びかける力」

震災当時は些細な事でチームの和が乱れていたことがあったが、団結を呼びかけるとともに各メンバーとコミュニケーションをとっていたことで改善されたと聴いて、
コミュニティを維持するには摩擦を恐れず常に改善していく姿勢が大事だと感じた。
自分の生活でもそのことを意識していきたい。

「美談はいらない」

“自分の役割を全うする”ということを学んだ。
震災直後、住民に必要なモノの一つに“情報”があり、東海新報社は地域密着にこだわり住民と市の架け橋となっていた。
自分たちの利益が見込めないとかわっているのにも関わらず行動に移す姿には大船渡を守りたいという気持ちが伝わってきた。
そしてあえてマイナスな面や反対の視点から報道し周りに流されない姿勢は印象的で、今何が必要かを見極める作業の大切さを学べた。

高台移転は良い考えだと感じたが、不公平が生まれる、自分の家があった元の場所にもう一度住みたいという意見があり、難しいことに気づいた。

自分も住んでいる家に愛着が持てるよう住んでいる場所に関心を持ち、その魅力を探したい。

「高台移転」

「震災前より活気のあるまちづくり」
大船渡市長の戸田さんの話には、震災前より経済が豊かで安全なまちづくりというテーマがあった。
震災で0からスタートするまちづくり計画には住民のための制度が組み込まれていた。
実際、まちを見る中で戸田さんの熱い思いを感じた。
やさしい雰囲気を持っている市長さんだからこそ、市民から受け入れられ、互いに協力し、復興を目指していけるのだ。

「決意。」

私は陸前高田の戸羽市長のお話を聞いた時、戸羽市長の心の強さに感銘を受けた。私が戸羽市長の立場なら、震災によって起きた出来事の重さに心が諦めてしまうと思ったからだ。
しかし戸羽市長は震災に負けず市長としての役目をしっかりと果たしていらした。
戸羽市長のお話を伺うことができた経験を通じ、私は戸羽市長のように目の前の困難に諦めない強い人間になるための努力をしようと思った。

「被災をプラスに考えるまちづくり」

陸前高田の戸羽市長が、ゼロからのスタートだから新しい街づくりができるという言葉に衝撃を受けました。
何か欠点があったとしてもそれは他と区別できるところであり、だからこそ出来ることを考える、被災をプラスに考えるのは素晴らしいと感じ、その言葉に自分の考え方が広げさせられた。

「新たな希望」

陸前高田のまちを守る大きな壁。
以前より高さが高くなった。
私たちに堤防の説明をして下さった職員の方は若いお二人であり、このまちを担っていく気概を感じた。
津波により堤防付近の土壌が変化することで新種の植物が芽生えた。
そしてその土地ではこれから祈念公園が出来るといふ。
このまちは前に進んでいると感じた。新たな希望と共に。

「大船渡を体感。」

自分が思っていたよりも復興は進んでおり、街づくりがより良く行われていると思いました。

また、テレビで見る東北の印象と異なっていたため、自分の目で見ることの大切さを改めて感じました。

「皆さんのおかげ」

陸前高田にあった会社は全て津波で流されてしまった。
けれど、大船渡でまたお酒を造れるようになりPRをあまりしなくても地元の人や口コミで知ってくれたひとに助けられここまでやってこれたと仰っていたのが印象的。
また、インターネットに疎く、PR が苦手などところがあると仰っていたので、そこが自分たちが貢献できるポテンシャルなのかなと思う。

「復興の象徴になる」

東日本大震災により被害を受けたものの、従業員の方々の必死な修復作業によりわずか3ヶ月で復旧を果たした姿に鎌田水産の方々の漁業に対する熱意を感じた。

震災後にすぐに会社の修復に尽力する社員の方の行動力はすごいと感じ、自分もまわりで何か起きた時には、手助けしようと思った。

「動いてみる、やってみる」

「行動をし、自分がやったことで人が喜ぶ」これが一番の生きがいであり、幸せだという言葉が印象的。

私の活動が自己満足になっていたことに気づき、周りの方の笑顔が自分の幸せだった初心を思い出せました。

また、自分がアクションを起こす勇氣、人と関わる上で大切なこと、人生における自分の存在意義を深く考えさせられました。

「貴重な思い出です。」

生徒それぞれが考え、何かをしようとしている姿に感心した。
メリットやデメリットを正確に分析し、現状を論理的に捉えて理解しようとしている高校生と様々な意見を交換できたのは貴重な体験でした。
自分も行動していかなければならないと強く思っています。

「被災からの復興」

今回初めて東北に足を運んで感じたことは、「被災の大きさと復興の大変さ」です。

実際に見てみるとイメージとは全く違い、被害をうけた場所がまだ復興していないところはありましたが、人の明るさというのが東北の印象的なところで「人の温かさコミュニティの復興」は進んでいるのではないかと思います。

「衝撃。」

「被災地というマイナスなイメージを持たれたくない、プラス・ポジティブなイメージを持ってほしい」という高校生の言葉が心に響いた。

どのようにポジティブなイメージを持ってもらうかを考え皆さんにこの言葉を伝えたいと思うようになった。